



・巻頭言……………1	・小島瓊禮先生を偲んで……………3
・研究所活動報告……………2	・催し物案内等……………4

実用の僕

経済学部長 大津 武

本稿執筆のお話をいただき、「民俗学」と私自身の関わりについて思案してみたが、思い当たることがほぼなかった。本学着任後、民俗学研究所の存在を知り、「民俗学」と「民族学」の識別を認識したというのが実際のところである。ただ、その成り立ちは、私でも聞き覚えのある「柳田國男」の寄贈書を納めた「柳田文庫・民俗学研究室」を基盤としているとのことであり、民話や伝承に関わる研究所であることは想像できた。それでも、『遠野物語』を題材としたエンターテインメントが思い浮かぶ程度である。以下では、私自身の関心と柳田國男の民俗学との接点を考えてみた。民俗学や文化人類学の門外漢の感想（随筆）であり、誤認や誤謬の可能性あることをお断りしておく。

柳田國男は農村困窮の救済に関心を持ち「経世済民」を志していたと言われている。「経世済民」という言葉は経済学の入門クラスでも「経済」の由来として紹介することがあり、親しみがある。19世紀中盤以降20世紀初頭にかけて「経済」がeconomyの訳語として定着するころには本来の意味は希薄になり「貨殖興利」の意味として解釈された。経済学の課題として「経世済民」は色褪せたとする向きもあるが、個人的には経済学が「経世済民」の学の一翼を担うものであってほしいと考えている。

個人的に共感を覚えたのは、柳田國男の実証主義的な研究姿勢である。柳田國男は「民俗学」における研究が随筆的なものに留まることを危惧し、科学として成立させることを目指していたようである。「民俗学の話」の中で「いやしくも、サイエンスと呼ばれようとする限りは、その方法——自然科学が成功している方法によらなければならないでしょう。すなわち、一般的の知識、人も我も共通に認める知識——何遍しらべて見ても、これこそ確実だと言うこ

との出来るようなもの——その証拠が、本当に支えてくれなければ、断定は出来ません」と述べ、さらに「とにかくそうした手続をとらないでは確かなものということ掲げない、この方法によって厳密に吟味して、他人も自分も認めないわけにゆかない結論に到達した場合に、これをセオリー、法則として掲げるのです」と述べている（『日本人とはなにか』河出書房新社2025, p.236）。そして、研究の材料としては文化「残留」（survivals：現在あるべきでないにもかかわらず残っているもの）を利用して比較研究を行う科学が「民俗学」であるとしている。

以上のように、状態を観測し仮説を立てて検証するという手順を踏むことを重視する実証主義的方法は、経済学において私が興味をもった研究方法に通じるところがある。戦後、国際的基準に則って国民所得統計に代表される経済データが各国で整備され、計算能力が高まるにつれ、経済理論に基づく仮説の検証が行われ、また、データ分析による経験則が発見されている。

最後に、柳田國男が遺した資料には将来の日本を担う学生が留意すべきメッセージが多く含まれていると思う。例えば、柳田は人々が自身の生活文化に対して主体的に考え批判し判断する能力を身に付けることが重要と考えていたという指摘がある。「民俗学」は「残留」を研究する科学として「正確に過去から今日あるまでの所以を説明」（前掲書, p.241）することにより正確な批判力や判断力の修養に資すると考えていたと推察される。その柳田は、日本人は「それとなく世の中の大勢をながめておって、皆が進む方向についていきさえすれば安全だという考え方が非常に強かった」（前掲書, p.90）とし、戦後の人口増加はその弊害を濃厚にしたとしている。様々な情報取得手段が発達した現在でも、依然として「大勢」で物事を判断することが多いと感じる。民俗学研究所を擁する本学の学生には、是非、所蔵の書物や資料の多くに触れ、主体的自己形成能力を修養して欲しいと願っている。（運営委員）



研究所活動報告

◆所員研究例会要旨 令和7年7月10日(木)開催

「令和の「山村調査」報告
—平成の大合併後の奥出雲町、新見市の民俗—」

荒井 浩 幸

当研究所の研究計画「山村・海村・離島調査」の創造的継承と発展に向けた基礎的研究—新たな0ポイントの構築に向けて—において、戦前の「山村調査」地の島根県旧八川村が属する奥出雲町、岡山県上刑部村が属する新見市を対象に、令和6年度の現地調査の中間報告を行った。今回の調査では、過去の調査地区を含め平成の大合併を経てより広域的となった2市町の住民から暮らしの変容や現在の課題などについて話を聞いた。

奥出雲町では、大正12年に終焉を迎えた、たたら製鉄で栄えてきた歴史をもつが、住民たちは過去のたたらに対し必ずしも詳しいわけではない。今を生きる現実的な問題として、農家が減少し、住民たちが「おいしい」という仁多米、仁多牛のブランドが衰退していつてしまうのではないかという危機感が感じられた。一方で、新たな対応も生じている。

「民具を研究すると何が分かるのか
～民俗知識による分類法～」

榎 美 香

近年、奈良県をはじめ各地の民俗博物館で民具の廃棄をめぐる問題が顕在化し、その存在価値が改めて問われるようになってきた。今回の報告は、こうした動きに対し、民具を研究することで実際どのようなことが明らかにできるのか、具体的な一例を示そうとしたものである。

民具が持つ他の資料にない特徴の一つが、製作者や使用者などから生きた民俗知識を取得できる点である。この強みを活かし、民俗知識自体を指標として地域分類や実測図のフォーマット設定を行い、その工程から地域の特質を分析する試みを報告した。

対象は房総半島南部の鍬とし、地域の農家・鍛冶屋・棒屋（鍬の柄など木工職人）らからの聞き取りを重ね合わせ、形態差とその理由を抽出していった。

例えば、粘土質の水田では重く丈夫な鍬が、

耕作が大変な棚田に、この数年、ドローンを利用した技術が急速に進歩しているという。また、旧八川村内の部落では、農業の法人化が始まっている。

新見市は中国道新見インター、鉄道ではJR3路線が乗り入れる新見駅が玄関口の交通の要衝だが、「交通が不便」という住民たちの語りに意外性を感じた。市内には新見公立大学があり若者はいるが、学生がアルバイトをする所が少ない。卒業後は、新見に残らないという。同様に新見育ちの若者が地元に残らず、進学や就職で岡山県南地域や関西に出ていってしまう。葬儀場で葬式を家族だけで行えるようになり、「部落の必要性がなくなった」「若者が他出し、葬儀後の葬式ツキアイができない」という声もある。農業では耕作放棄地が増える一方、自身で稲作をする大変なため、田植えから稲刈りまで農協に有料で依頼、あるいは田植えは人に任せ、稲刈りとその後の作業を自分で行っている高齢の農家も多い。

今回の調査では、これまでの「山村調査」の対象となった地区や家の個別の民俗変化と現状を調べ、過去との比較ができるようにすることが重要な課題である。（研究員）

深田では金鍬より風呂鍬が、砂地では軽量で細身の鍬が好まれる。傾斜のきつい山間部の畑では、土が下に落ちないように上に立って耕すため柄の角度は大きくなる。漁業が盛んな漁村では農業の担い手が女性であるため握りのない軽い素材の柄が選ばれる。このように語られる鍬の各部の違いには、地域ごとの土質、地形、用途、社会的背景、製造技法などに対する多様な民俗知識が反映されていた。抽出された指標から大きく9類型を設定し、それぞれの実測図フォーマットを試作したうえで、分類タイプで地域や時代との関係性を整理し、各分類の根拠を明確化した。これにより、収集地が分からない鍬でもその形から地域・用途・時代をある程度見分けられる可能性を示した。

即ち、民具は民俗知識と結びついて文化の多様性を映す鏡であり、各地域の生活を具体的に語ることが出来る有効な資料であるといえる。経験による生きた民俗知識を聞き取れる機会は減っているとはいえ、どの時代でもできることはまだまだある。今後は特に民具の製作者が有する民俗技術の視点から、研究を深めていきたいと考えている。（研究員）

最後の民間伝承の学者

—小島 璦 禮 先生を偲んで

小島璦禮先生は、昭和10年神奈川に生まれ、柳田國男、折口信夫の学問にあこがれて國學院大學の文学部へ進学した。柳田から直接の薫陶を受けた世代であり、國學院大學大学院を出ると、定年まで琉球大学で教鞭をとり、退官後再び故郷の神奈川へと戻られた。

神奈川へ戻られてからは、成城大学大学院でも教鞭をふるっていただき、研究所へも講演や寄稿等、研究面での数々のご助力をいただいていたが、中でも、平成22年11月から令和2年5月までの10年間もの間、民俗学研究所の客員所員を務めていただくこととなり、任期中は、『三倉沿革』『高野山文書研究』という研究所の二大貴重資料の翻刻出版に絶大なご尽力を賜った。

講演会では平成16年5月15日に「柳田國男の文化史学の神髄—琉球諸島の産育習俗の体系を例に—」、平成24年6月9日に柳田文庫50年記念事業で「柳田國男の歴史科学思想—春秋新年への遡及を考える—」と2度ご講演いただいております、研究所の半世紀の歴史で講演会を2度受け持ったのは、小島先生ただ一人である。寄稿においては、ここにすべてを挙げることは到底できないほどの成果をいただいているが、代表的なものを抜粋して紹介する。

<民俗学研究所紀要>31集「柳田國男の「地方の研究」時代—明治四十二年の愛川村訪問から大正七年の内郷村調査へ」、33集「歌垣そして春唄・秋唄—日本の歌の発生(第一稿) —」、36集「柳田國男の日本縦断の旅(講演録)」、39集「耳を切り鼻を削ぎ髪を切り—柳田國男『高野山文書研究』解題外編—」。29、37集に上記講演録。

<紀要別冊>『三倉沿革』、『高野山文書研究』(第一～七冊)全体の編集、解題執筆。

<諸國叢書>22・23合併輯『熊野年代記』解題「柳田國男と『熊野年代記』」、24輯『真名長者実記』『満之長者一代記』解題「伊東東と柳田國男」、及び「伊東東あて柳田國男書簡」翻刻。

<民研ニュース>「シリーズ 柳田文庫読書ノート」全11回、73、81、83、84、85、99、104、109、110、114、115号。

その他にも、「ニュース」への寄稿や、展示目録への寄稿(「祈願の形としてのハラエ」『絵馬に込められた祈りの心』平成23年)等、枚挙にいとまがない。

小島先生には、前述の『三倉沿革』から「高野山文書研究」へ続く研究所の柳田自筆資料刊行プロジェ



成城大学職員 林 洋 平

クトでは、企画から資料整理、調査、執筆まで大部分を担っていただいた。

資料を解体し、柳田の執筆原稿を復元する作業では、柳田が参照したと思われる『高野山文書』すべてのページを確認して対応表を作成し、柳田の誤記の訂正や、索引作成まで行われた。また、各巻に非常に充実した解題を執筆していただいております、これらの解題は、『中世の村への旅—柳田國男『高野山文書研究』『三倉沿革』をめぐる—』(アーツアンドクラフツ2020.11)としても刊行されている。

小島先生は解題執筆準備のために、毎年必ず現地調査を行っている。執筆にあたって研究所から先生へ、「民俗学の眼で書いて欲しい」とお願いをしたのだが、先生はその問いの答えを「現地の村に立って、古くから伝わって来た村の生活の結晶が、どのように生きているかを発見すること」と考えたという。

『三倉沿革』『高野山文書研究』をまとめていた当時の柳田は、新渡戸稲造の地方学の影響を受けていた。その土地に暮らす人々の視点を取り入れることを目指した地方学、それを下地として作られた柳田の「民間伝承の学」の眼をもって、小島先生は「高野山文書研究」にまつわる村々に足を運ばれた。

小島先生の思い出のエピソードに、柳田と同じ目線を得るために、柳田の「海南小記の旅」の行程をそのまま辿る旅を行ったが、その際には、現地を訪れる日付まで柳田の旅に合わせて、季節感や土地の空気を感じて周ったそうである。

『中世の村への旅』のあとがきにも書かれているが、高野山文書研究の旅から帰ると、小島先生は、小野武夫の表現する「千年百姓の家」を思い出すとおっしゃっていた。悠久の昔から続く人の営みの源流に思いを寄せる研究姿勢は、弟子たちによって「民俗学」が体系化する以前、柳田が自身の学問として大事にした「民間伝承の学」の姿であつたろう。

柳田は、若い研究者のために自身の学問が「民俗学」として昇華／変化されていくことに怒気をもって抗い、また慈愛をもって認めたというのが、柳田が大切に育てた学問をそのまま引き継いだ研究者は多くはない。柳田の警咳に接した研究者も「民俗学」へと進んでいく中、小島先生は、最後の「民間伝承の学者」であつた。



民俗学研究所 柳田國男生誕 150 年記念特別展

柳田國男と民俗学 —はじまりとしての旅—



会期：11月2・3日（文化祭）、5日～29日

※文化祭を除く日祝・11/4は休館

時間：午前10時～午後4時＜土曜日は正午まで＞

会場：民俗学研究所展示室（大学4号館3階）

※日程が変更になる場合があります。ウェブサイト（<https://www.seijo.ac.jp/research/folklore/>）をご確認ください。

電話：03-3482-9097（平日午前9時～午後4時30分、土曜午前9時～正午）

メール：minken@seijo.ac.jp

柳田國男生誕150年を記念して、柳田が確立した日本民俗学の形成過程と成果についてご紹介いたします。

柳田は東京大学で経済学や法学を学び、卒業論文では産業組合に関する研究をしています。産業組合の根拠法である産業組合法が制定された明治33（1900）年に、柳田は農商務省に奉職し農政課に配属されました。産業組合の啓発普及活動に従事する日本で最初の産業組合担当者となりました。

柳田の最初の著作である『産業組合』に

おいて、日本で産業組合を設立していくためには、人間的基礎を確立しておくことが必要であることを主張し、人間的基礎を再確認するために柳田の関心は人間研究に向かいます。『時代と農政』と『遠野物語』を刊行した1910年は、柳田の日本民俗学形成に向けての結節点となりました。

本展では柳田の前半生の旅に焦点をあて、経済史学を基点とした日本民俗学形成への過程と確立後の教育学等への展開について理解を深める一助といたします。

皆さまのご来観をお待ちいたしております。

編集後記

民研ニュース150号をお送りします。巻頭言には運営委員の天津武経済学部長から「実用の僕」との題名で、ご自身の関心と民俗学についてご寄稿いただきました。民研の役割についても、大変示唆に富むご意見をいただきました。荒井浩幸研究員と榎美香研究員からは、研究例会での報告をご寄稿いただきました。

民研の活動に多大な貢献をいただいた小

島環禮先生のご逝去に際し、追悼文を本学の林洋平氏からいただきました。先生のご冥福をお祈り致します。

民研では例年秋期に展示を行っていますが、今年度は柳田國男生誕150年記念特別展として「柳田國男と民俗学—はじまりとしての旅—」と題して開催いたします。ぜひ、ご来観ください。末筆になりますが、協力いただいた執筆者の皆さまに感謝申し上げます。

民俗学研究所ニュース No.150



令和7年10月15日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp